

農業技術情報

令和5年6月19日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A 幕別町	0155- 54-4118
J A 札内	56-2131
J A 帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町6月15日）

（ ）内は平年値（※春まき小麦は暫定）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早2	草丈 76.2(78.4)cm 茎数 572(732)本/m ²	出穂始 5/30(6/2) 出穂期 6/2(6/4) 出穂揃 6/4(6/6)
春まき小麦 (はるきらり)	早3	草丈 50.5(64.7)cm 茎数 600(870)本/m ²	止葉期 6/3(6/7) 出穂始 6/9(6/15) 出穂期 6/12(6/17)
馬鈴しょ	早3	茎長 29.3(21.1)cm 茎数 3.6(3.6)本	着蕾期 6/9(6/12)
大豆	早5	茎長 10.5(8.5)cm 葉数 1.3(1.0)枚	出芽期 5/26(5/29)
小豆	早3	茎長 4.1(3.6)cm 葉数 0.9(0.4)枚	出芽始 5/31(6/1) 出芽期 6/2(6/3)
菜豆(金時)	早1	茎長 7.3(6.7)cm 葉数 0.9(0.5)枚 は種期 5/30(5/31) は種終 6/6(6/4)	出芽始 6/5(6/6) 出芽期 6/8(6/9)
てん菜(移植)	早2	草丈 32.7(31.6)cm 葉数 15.6(14.8)枚	
てん菜(直播)	早2	草丈 19.8(15.0)cm 葉数 10.5(9.7)枚	
牧草	早2	草丈 98.4(97.9)cm 1番収穫始 6/11(6/10)	出穂始 6/4(6/6) 出穂期 6/10(6/12)
飼料用とうもろこし	±0	草丈 36.5(36.9)cm 葉数 6.8(6.9)枚	
ながいも(マルチ)	遅2	植付終 5/24(5/30)	萌芽期 6/11(6/9)
たまねぎ	±0	草丈 32.4cm(35.3)cm 生葉数 6.0(5.7)枚 葉鞘径 9.9(10.0)mm	

畑作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

< 麦類 >

1 赤かび病の防除

秋まき小麦では場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除を実施した場合は、生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、2回目以降の防除を実施してください。

春まき小麦(はるきらり)の出穂期は作況ほ場で6/12頃と平年よりやや早くなっています。出穂揃が1回目の防除時期となっていますので、表1を参考に適切な防除に努めてください。

表1 赤かび病の防除薬剤例

防除時期		農薬名	RACコード※	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
春小麦	1回目 開花始	プロラインフロアブル	3	2,000	収穫21日前まで	2回
春小麦 秋小麦	2回目 1回目の7日後	ミラビスフロアブル	7	1,500	収穫7日前まで	2回
	3回目 2回目の7~10日後	バラライカ水和剤※1	M4・3	500	収穫14日前まで	2回
	臨機 3回目の7~10日後	ベフトップジンフロアブル	M7・1	800~1,000	収穫14日前まで	3回

※1 バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。

①バラライカ水和剤 → ②硝酸カルシウム (物理性の問題のため)

※DMI剤(RACコード:3)は、周辺作物に薬害が生じる可能性があるため飛散に注意する。

※農薬の耐性・抵抗性の発達を防ぐため、作用点や作用機構から各農薬の有効成分を分類したものが「RACコード」です。「RACコード」が同じであれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

2 赤さび病の防除

町内で赤さび病の発生が確認されています。ほ場を確認して、発生が確認された場合は臨機防除で対応しましょう。

表2 赤さび病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
ミリオネアフロアブル	7	4,000~8,000	収穫7日前	2回

※ミリオネアフロアブルを使用した場合、ミラビスフロアブルは同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

3 アブラムシ類の防除

町内で寄生が確認されています。ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【要防除水準】

出穂 10 日後頃、ほ場のおよそ半分以上の穂で寄生が観察された場合に防除する。(薬剤は 6/2 付技術情報参照)。

4 ムギクロハモグリバエの防除

本年はムギクロハモグリバエによる葉の食害がみられています。一部ほ場では止葉から上位 2 葉に食害痕が確認されており、発生は多いとみえています。まだ被害が少ないほ場においても葉内に卵が存在している可能性があり、今後被害が拡大する恐れがあります。現在の寄生が少なく次回赤かび病防除まで待てる場合は同時防除を、食害が目立ち次回赤かび防除まで間がある場合、速やかに防除してください。

薬剤はスミチオン乳剤、エルサン乳剤など、浸透移行性のある有機リン系殺虫剤でアブラムシ類との同時防除が可能です。

5 葉面散布による窒素追肥について

適正タンパク値の確保や粒重の増加を目的として窒素の葉面散布を行う場合、「尿素使用の場合は1.0～1.5%液を3回(窒素成分で1回0.5～0.7kg/10a)」で検討してください。

6 亜リン酸液肥との同時防除で穂発芽の防止を

春まき小麦の両品種は穂発芽耐性が低いのが難点であり、収穫前の降雨で品質が大きく左右されます。下記に紹介されるような亜リン酸液肥は、開花期以降 3～4 回散布することで穂発芽の発生を抑える効果があります。その他にも粒重の増加や耐病性の強化が期待できますので、赤かび病防除と併せて散布を検討しましょう。

表3 亜リン酸液肥使用例

商品名	使用時期	使用倍率	備考
サンカラー	開花期以降から7～10 日間隔で3～4 回	400倍	赤かび病防除薬剤との混用が可能

7 小麦「なまぐさ黒穂病」への注意

十勝では発生が確認されていませんが、注意が必要です。「なまぐさ黒穂病」に汚染された収穫物が乾燥貯蔵施設に混入した場合、施設全体が汚染されることとなり出荷不能になるなど、大きな被害をもたらします。感染している場合、乳熟期までには外観から症状が確認できるようになりますので、下記を参考に、万が一疑わしい株を発見したら、JAあるいは普及センターにお知らせください。

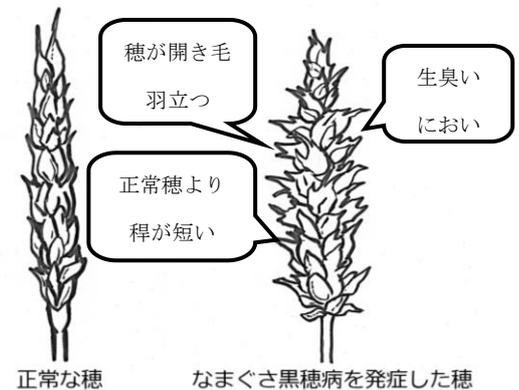


図1 なまぐさ黒穂病の特徴

< てんさい >

中耕により地温上昇を図るとともに、畦間が茎葉で覆われる前までにほ場や降雨の状況を踏まえ、最終の中耕を終えましょう。中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

1 根腐病の防除<<6月中旬～7月上旬までを目途に>>

「連作・短期輪作ほ場」及び「前回作付時に根腐病が多発したほ場」、「排水性の劣るほ場」では、必ず防除を実施してください。上記の条件で、曇天によりほ場の湿潤状態が続く場合は、2回目の根腐病防除を検討しましょう。

表4 根腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
ミリオネアフロアブル	7	4,000	収穫7日前	4回
リンバー顆粒水和剤	7	4,000	収穫7日前	3回
アミスター20フロアブル	11	1,500	収穫14日前	3回

※根腐病防除は散布水量 10a 当 200L の株元散布とします。

2 アブラムシ類・ヨトウガの防除

今回の防除はアブラムシ類とヨトウガを同時に防除するため、下記薬剤で実施をお願いします。期間は日甜ハガキを参照してください(6月20日～25日)。

表5 アブラムシ・ヨトウガの防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
リーズン顆粒水和剤	4A,15	3,000	収穫14日前	2回

※リーズン顆粒水和剤はアクタラとマッチの混用剤です。マッチは殺卵効果がありますが、老齢虫には効果が低いので遅れずに防除してください。

3 中耕

- (1) 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」・「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、初期生育の促進に努めましょう。
- (2) 中耕作業の深さと広さは根の広がりを確認し、生育初期には浅めに調整し、次第に狭く深くして畦間が茎葉で覆われる時期(草丈35cmくらい)までに実施しましょう。
- (3) 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

4 除草剤散布

- (1) 除草剤のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、実施しましょう。
- (2) 直播てん菜は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

※日甜ハガキ情報や「農作物病害虫防除基準・除草剤使用基準」を参照して適切な防除を実施してください。

< ばれいしょ >

1 疫病の防除

ばれいしょ疫病菌は10℃を超えると活動が始まり、最適気温18～20℃の多湿条件で多発します。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい凹地(排水不良箇所)、トラクタの車輪のぬかるんだところ(防除畦など)、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。

(FLABS 危険期到達日 6月12日、防除開始目安 6月19日)

- (1) 初発前に必ず防除:ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。
- (2) 初回の防除前に感染が疑われる場合:治療効果のある薬剤を使用。
- (3) 作物の生育に応じた薬剤選択:茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。
- (4) 降雨に応じた薬剤選択:ほ場に入れない状況が予想される場合は、Wインターバル(14日間隔)効果のある薬剤※の使用を検討してください。実施する場合は、初発前から散布してください。

※「リライアブルフロアブル 800倍」、「プロポーズ顆粒水和剤 750倍」、「ライメイフロアブル 2,000倍」、「レーバスフロアブル 1,500倍」、「ランマンフロアブル 1,000倍」、「フロンサイドSC1,500倍」(平成25年度指導参考)。

表6 疫病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	効果の発現	浸透移行性
グリーンダイセンM水和剤	M3	400~600	7日	10回	予防	
リライアブルフロアブル	43,28	800~1,000	7日	3回	予防治療	○
ゾーベックエンカンティア	49,11	2,000	14日	2回	予防治療	○
フロンサイドSC※1	29	1,000~2,000	7日	4回	予防	

※1 「フロンサイドSC」は 1,000 倍で菌核病、2,000 倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

2 軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件で多発しますが、本格的な軟腐病防除は、開花期以降(7月上中旬)となります。そのため、早い時期の疫病防除に併せて実施する必要はありません。ただし、強風や培土作業等で茎葉が傷ついた場合は、傷口からの感染を防ぐため防除を行いましょう。初期防除を心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表7 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	効果の発現
スターナ水和剤	31※1	1,000	7日	5回	予防・治療
バクテサイド水和剤	41,25※2,M1	750~1,000	7日	5回	予防・治療
マテリーナ水和剤	31※1,25※2	1,000	7日	3回	予防・治療
カスミンホルドー 銅シン水和剤	24,M1	500~800	7日	3回	予防・治療
マスタピース水和剤	生物農薬	1,000	前日	—	予防

※1 オキシリニック酸(RACコード31)に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。また、オキシリニック酸(RACコード31)を含む剤の使用は合計5回までとする。

※2 ストレプトマイシン(RACコード25)を含む剤の使用は合計5回までとする。

3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

本年はアブラムシの発生期が「やや早」、発生量は「やや多」と予想されています(北海道病害虫防除所「6月予報」)。林地や防風林近くの多発に注意し、ほ場をよく観察し、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表8 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除薬剤例

農薬名	RACコード	対象害虫			使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
		アブラムシ類※	オオニジュウヤホシテントウ	ナストビハムシ			
モスピランSL液剤	4A	◎(ワタ)	◎	◎	4,000	7日	3回
アドマイヤー顆粒水和剤	4A	◎ (ジャガ/モモ/ワタ)	◎		5,000~15,000	14日	2回
アクタラ顆粒水溶剤	4A	◎3,000倍 (ジャガ/ワタ)	○	◎ 2,000倍	左記参照	14日	3回
ベジホン乳剤	1B,3A	◎ (ジャガ1,000/ ワタ2,000倍)		◎ 1,000倍	左記参照	30日	2回
ペイオフME液剤	3A	◎ (ジャガ2,000/ ワタ1,000倍)	◎	○	2,000	7日	4回
ゲットアウトWDG	3A	◎ (ジャガ/モモ)		◎	2,000~3,000	7日	4回
マブリックEW	3A	◎(ジャガ)			4,000	7日	2回
モベントフロアブル	23	◎(ワタ)			4,000	7日	3回
ウララDF	29	◎ (ジャガ/モモ/ワタ)			4,000	7日	2回
コルト顆粒水和剤	9B	◎ (ジャガ/モモ/ワタ)			4,000~6,000	前日	3回

※ジャガ: ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ: モモアカアブラムシ、ワタ: ワタアブラムシ

※◎は登録があり、道ガイドに掲載されているもの、○は登録があるもの(以下、同じ)

※モベントフロアブルは銅ストマイ水和剤とは混用しない(ストレーナに付着物が生じる)。また、ストレプトマイシン含有殺菌剤との混用の場合は、モベントフロアブルを先に希釈する。

<豆類>

1 中耕

初期生育を確保するために、除草剤の残効を考慮しながら、暖かい日に中耕を実施し地温の上昇を図りましょう。また、遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始 10 日前まで(7 月上中旬頃)には最終の培土を終えましょう。

2 大豆「わい化病」・金時「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

病虫害発生予察情報によると、ジャガイモヒゲナガアブラムシの発生期は「早」・発生量は「多」と、飛来時期は早い予測となっております。

表9 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」の防除例

病害名	薬剤名	使用濃度	使用時期(収穫前)	回数(以内)
大豆「わい化病」 菜豆「黄化病」	ペイオフME液剤	2,000 倍	7日	3回

防除時期: クルーザーを使用していない場合…出芽揃～初生葉展開期に1回目、6月中下旬に2回目
クルーザーを使用した場合…6月中下旬(は種後1ヶ月程度をめぐり)の1回

3 小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、発生が予想されるほ場は、予防防除や溝切りによる排水を実施してください。

表 10 小豆「茎疫病」の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
ランマンフロアブル	21	1,000	7日	3回
レーバスフロアブル	40	2,000	7日	3回
リドミルゴールドMZ	M3,4	500	30日	3回

4 小豆のアブラムシ類の防除

マメアブラムシは局所的に多発生するので、ほ場をよく観察し寄生が目立ったら早急に防除してください。

表 11 小豆のアブラムシの防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
モスピランSL液剤	4A	2,000～4,000	14日	3回
ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回
ペイオフME液剤	3A	2,000	7日	3回

5 菜豆(金時)「かさ枯病」の防除

かさ枯病に罹病すると本葉に赤褐色の斑点が生じ、周辺部が黄色くなり葉脈はすじ状に赤褐色を呈し激しい場合は株が黄変し枯死します。本病は低温多湿で発生しやすく、機械管理作業の接触でまん延します。発生が予想される場合は6/2号を参照し防除して下さい。

6 菜豆の「根腐病」発生時の対策

発芽後数週間で感染が起こり、6月中～下旬に降雨と高温が続くことで発病が激しくなります。発病株を発見したら、健全部の新根の発生を促すため、早期に培土しましょう。

野菜

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

<レタス>

(1) ナモグリバエの防除

平均気温が15～20℃になる6月中～下旬は成虫の発生が多くなります。

表1 ナモグリバエの防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数
ダントツ水溶剤	4A	2,000倍	収穫前日	2回以内
アフーム乳剤	6	1,000～2,000倍	収穫3日前	3回以内
コテツフロアブル	13	2,000倍	収穫前日	2回以内

(2) 各種病害の防除

菌核病と灰色かび病は、15～20℃の多湿条件、べと病は15℃程度の多湿条件で発生が多くなります。灰色かび病は特に結球期に発生しやすくなります。

※薬剤については、「6月2日技術情報もしくは令和5年度農作物病害虫防除基準」を参照。

軟腐病、腐敗病、すそ枯病は高温多湿条件で発生が助長されます。今後の天候に注意してください。

表2 レタス軟腐病、腐敗病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数
カセット水和剤	31	1,000倍	収穫7日前	2回以内
	24			
バリダシン液剤5	U18	800倍	収穫前日	3回以内

<キャベツ、はくさい>

(1) コナガ・アオムシの防除

気温の上昇とともにコナガ、モンシロチョウの発生が増えることが予想されます。ほ場を確認し、定期的な防除に努めてください。

コナガは薬剤抵抗性がつきやすいので、RACコードを確認し、ローテーション防除を心がけましょう。

(2) 軟腐病の予防防除

はくさい: 予防防除開始時期です。外葉形成期から防除を開始してください。

キャベツ: 結球期に発生が多くなります。結球初期から防除を開始してください。

害虫の食痕等の傷口が侵入経路となるため、同時に害虫防除も注意が必要です。

(3) べと病・菌核病の防除

べと病は15℃程度、菌核病は15～20℃程度の多湿条件で発生が助長されます。

※薬剤については、「6月2日技術情報もしくは令和5年度農作物病害虫防除基準」を参照。

<だいこん>

(1) 亀裂褐変症と軟腐病の予防防除

多湿条件で気温が高くなると亀裂褐変症や軟腐病の発生が助長されます。

※は種後25日目までの薬剤については、

「6月2日技術情報もしくは令和5年度農作物病害虫防除基準」を参照。

表3 だいこんの病害防除例

防除時期	病害名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
は種後 30日目	軟腐病	スターナ 水和剤	31	1,000倍	収穫14日前	5回以内

(2)キスジノミハムシとコナガの防除

気温の上昇とともに発生が増えることが予想されます。確認した場合は防除を実施してください。

表4 だいこんの害虫防除薬剤例

防除時期	病害名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数	注意事項
は種後 30日目	キスジ ノミハムシ アブラムシ類	ベネビア OD	28	2,000倍	収穫前日	3回 以内	銅剤の混用・展着 剤の加用で薬害 の恐れあり
は種後 37日目	コナガ アブラムシ類	パダン SG 水和剤	14	1,500倍	収穫7日前	3回 以内	
は種後 44日目	コナガ アオムシ	フローバック DF	11A	1,000～ 2,000倍	収穫前日 (発生初期)	—	

<にんじん>**(1)軟腐病の発生に注意**

高温多湿条件で発生しやすくなります。気象状況に応じ、防除を実施してください。

表5 にんじん軟腐病の防除薬剤例

薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用 時期	使用 回数	黒葉枯病	注意事項
Zボルドー	M1	500	—	—	○ (500～800 倍)	・薬害軽減のため、クレフノン 200 倍を加用し、葉面散布剤との混 用避ける。
コサイド3000	M1	2,000	—	—	○ (500～ 1,000倍)	・高温多湿時の使用は避ける。 ・薬剤投入フィルターを外し、水を入 れてから徐々に薬剤を入れる。
カスミンボルドー	24	1,000	収穫 14日前	2回	○	
銅パースン水和剤	M1					
スターナ水和剤	31	1,000	収穫 7日前	3回		

(2)計画的な分施

計画的な分施を行う場合は、発芽後50～60日頃に行いましょう。本葉6葉期頃から根部肥大が顕著となり、窒素 とカリの吸収量が大きくなります。

<ながいも>**(1)強雨後の対応について**

トレンチャー溝の陥没が発生した場合は、早期に埋め戻しを行い、被害拡大を防いでください。また、土壌の流出による肥料の流亡が心配される場合は、土壌ECの測定を受け付けておりますので、普及センターまでお問い合わせください(TEL:015-572-3128)。

(2)アブラムシの防除

アブラムシはウイルス病を媒介します。特に種子ほ場では、アブラムシの発生が確認された際は防除を実施してください。

表6 アブラムシの防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
オルトラン水和剤	1B	1,000	収穫45日前	1回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4A	4,000	収穫7日前	3回以内
アディオン乳剤	3A	2,000～3,000	収穫7日前	5回以内

<たまねぎ>

(1)ネギアザミウマ・ハエ類の防除

ネギアザミウマの発生が確認されています。ほ場を確認し防除を実施してください。また、ほ場でタマネギバエによる縦に並んだ白い点状の成虫食痕を確認したら、直ちに防除を実施してください。

(2)白斑葉枯病・小菌核病の防除

定期的な予防防除に努めてください。また、作物体全体に薬液が付くよう水量 120L/10a で防除してください。

表7 たまねぎネギアザミウマの防除体系例

防除時期	害虫名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
6/下	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	グレーシア乳剤	30	2,000 倍	収穫 7日前	2回 以内
7/上	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	ディアナ SC	5	2,500～ 5,000 倍	収穫前日	2回 以内

表8 たまねぎ白斑葉枯病・小菌核病の防除体系例

防除時期	病害名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
6/下	白斑葉枯病 小菌核病	パレード20 フロアブル	7	2,000 倍	収穫前日	3回 以内
	軟腐病	コサイド 3000	M1	1,000 倍	—	—
7/上	白斑葉枯病 小菌核病	ファンタジスタ 顆粒水和剤	11	2,000～3,000 倍	収穫前日	5回 以内
	軟腐病	アグレプト液剤	25	1,000 倍	収穫7日前	5回 以内
		コサイド 3000	M1	1,000 倍	—	—

～農薬の安全使用と農作業安全に努めましょう！！～

□ 農薬危害防止活動の実施

- ★農薬の使用基準や注意事項を確認し遵守しましょう。
- ★除草剤等の散布でスプレーヤを使用する際には周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。
- ★使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。
- ★農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

□ 春の農作業安全運動強調月間（4～6月）

農作業の遅れによる「焦り」や長時間作業の疲れによる「不注意」などに伴う農作業事故の発生が懸念されます。

- ★機械の調整・整備等の際は、必ずエンジンを止めましょう。
- ★必ず機械を止めてから乗り降りしましょう（飛び乗り、飛び降りはいしな）。
- ★二人以上で作業する時や危険と思われる作業に入る前には、必ず声を掛け合ひましょう。

土壌診断を活用しましょう

土壌診断を実施し、適切な肥料選定をすることで、養分バランスの適正化とコスト節減に活用しましょう。
特にリン酸・カリの蓄積が進んでいるほ場が多い傾向にありますので、土壌診断に基づき、適切な施肥設計を行いましょう。
※生育期間中でも、畝間から土壌サンプルの採取は可能です。